

浜 私 幼

横浜市幼稚園協会 協会報 No272

公益社団法人 横浜市幼稚園協会 発行
〒221-0055
横浜市神奈川区大野町 1-25
横浜ポートサイドプレイス アネックス 5F
電話 045 (534) 8708
<http://www.kids-yokohama.or.jp>
編集 横浜市幼稚園協会広報部
発行者 木元 茂
印刷所 株式会社横濱大氣堂

- ◆ 第55回横浜市幼稚園教育研究大会
- ◆ 第57回神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会

統一
テーマ

「今だから考えよう！幼稚園教育の本質を！」

平成30年1月20日(土) 横浜文化体育館

平成30年1月20日(土)、横浜文化体育館で、第55回横浜市幼稚園教育研究大会が開かれた。今年は会場の都合により午前中に分科会、午後から全体会が行われ、横浜市内の幼稚園教職員を始めとした多くの参加者を迎えて盛大に開催された。

開会式では、運営委員長として神奈川県私立幼稚園連合会会長の小澤俊通氏より「幼児教育・保育の無償化が実現しようとしている。長い間、署名活動をした経緯があり喜ばしいことである。ただ、幼稚園、保育所で無償になる時間の差という点など課題もある。国民誰もが公平性のある幼児教育無償化の実現に向けて注目していきたい。みなさんが幼稚園教諭の道を選択されたことは、生き方の選択をしたということ。自分の夢の実現、子どもの成長にこれからも日々奮闘し、

頑張っていきましょう」と挨拶があった。

横浜市幼稚園協会の木元茂会長からは「政府が打ち出した幼児教育・保育の無償化、そして、幼稚園での2歳児預かりも今年度中には具体化し、4月からは教育要領改訂の年になる。定期的に教育要領が改訂されることも、それに対応して保育に工夫を凝らすことも、子どもたちと共に私たち自身が成長するきっかけになると前向きにとらえ、今年一年過ごして参りましょう」と述べた。続いて、来賓として柏崎誠横浜市副市長、八尋有造神奈川県民局次世代育成部私学振興課課長より祝辞をいただいた。

その後、「チベットと日本 異文化を超えて」というテーマでチベット出身の音楽家のバイマーヤンジン先生による講演会が行われた。



▲講演を行う音楽家のバイマーヤンジン先生

「チベットと日本 異文化を超えて」

横浜市幼稚園教育研究大会 全体会講演

講師：声楽家 バイマーヤンジン先生

チベットについて

チベットで結婚式、お正月、祭りの日に着る正装で来ました。この大会にお招きいただき本当にうれしく思っております。23年前に初めて来日し、大阪に住んでいます。ところどころ大阪弁が出ると思いますがお付き合いください。

チベットから来たと言うとモンゴルと間違える人やどこにあるかも知らない日本人が今でもたくさんいます。なぜ、日本に来たのですかという質問が一番多く受けます。それは、大好きな大好きな主人が日本人だったからです。主人の出身の大阪にずっと住んでいます。

チベットの素晴らしさを教えてくれたのは主人です。チベットを遠い国と思っている人が多いですが、今は交通の便も良くなっています。チベットまでの一番近い道のお教えしましょう。私は大阪に住んでいるので関西空港から飛行機で成都(中国の四川)へ、そこからチベットの古都ラサへは飛行機で2時間です。でも、私の故郷ガワは成都から車に乗って2日間で着きます。故郷は富士山よりも標高が高いため主人は訪れるたびに高山病になってしまいます。冬には-20℃になるので6月から9月の季節に訪れると、チベットの自然が人間を浄化してくれて皆さんを癒してくれると思います。いつでもご案内します、ぜひ訪れてください。

おいたち

私は11人兄弟の9番目に生まれました。電気もなく貧しい暮らしで、小さい時の記憶はいつもお腹を空かせていました。そんな自分が、今、日本にいて幸せを感じられるのは、両親の決断と兄弟の協力、近所の応援、そして今まで出会った先生たちのお陰です。両親は字が読めなかったため、だまされて草原の開拓を承諾する誓約書にサインしてしまいました。近所の人たちにも迷惑をかけとても悔しい思いをし、その時、教育の大切さを痛感しました。自分の子どもは一人でも学校に通わせたいという思いから私は学校に通えることになりました。遠い学校に毎日通い、中学校の先生が「もっと勉強させなさい」と両親を説得してくださり、300km離れた高校に入学できました。下宿生活が始まると自分の学費を稼ぐためにしていた牛乳配りや牛の糞拾い(燃料に

なる)の仕事から解放され勉強はせず遊びました。半年後、故郷に帰った時、弟2人が-20℃の雪の草原に牛の糞を拾いに行く姿を見て、「兄姉は下の弟妹を守ってあげるもので自分もそうしてもらって大きくなったのに、弟たちに辛い思いをさせて自分は何をしているんだ」と猛省しました。その時、中学校の先生から「勉強を頑張って大学に行けば国から仕事がもらえて給料がもらえて家族みんなが楽になる」と言われたことを思い出し、それから1日も休まず頑張って勉強しました。寮の消灯後は公衆トイレの明かりを頼りに猛勉強し大学に合格することができたのです。学生たちを一人でも多く自立できるようにと親以上に必死に進学のアドバイスしてくれた高校の先生が涙を流して喜んでくれました。故郷の両親も兄弟も近所の人たちも大喜びで、みんなのお陰で大学に行くことができたのです。

中国の大学に入学

チベットの遊牧民として初めて大学に入学しましたが、今までの人生で一番つらい時代でした。

大学では民族差別からいじめを受け、寮では新入生全員から拒否され、1年生なのに4年生と同じ寮になってしまいました。言葉では表せないくらいの孤独を感じ、夢もなくなり大学を辞めたいと思うようになりましたが、このまま故郷に帰れば兄が悔しがりお母さんが泣くだろうと一晩泣きあかし、自分は絶対に家族を悲しませることはしないと決心して思いとどまりました。日焼けで黒い顔や服は変えられないので、相手を見返すには勉強しかないと奮起し、成績を上げるために頑張って勉強し、教員試験に合格して、私は母校の先生になる事ができました。

卒業式の日、運命を変えることが起きたのです。「あなたはチベット人？チベットは素晴らしいところですね！」と声をかけてきた男性が後に主人になる日本人でした。4年間辛いことばかりの中で優しくされたことがうれしくて、日本に興味を持って図書館で日本について一生懸命調べました。

大学に就職と結婚

大学の先生になって、両親にも仕送りできるようになりました。日本人の男性とお付き合いして結婚も決まったころ、「日本人と結婚するの?」「苦労す

るよ」「日本人は結婚すると奥さんを外に出さないよ」など同僚に言われ、また、当時「おしん」のドラマが流行していてなおさら不安になったこともあり、そのたびに主人から「大丈夫！私が守ってあげるから信じて」と言われ感激してこの人についていこうと決心しました。

日本に来て驚いたこと

サラリーマンも遊牧民も朝が早いのは一緒です。でも帰る時間は、牛が帰る日没になっても主人は帰らず、毎日遅くまで働き、疲れ切って帰ってくる。「私が守ってあげる」と言った主人は自分自身も守り切れていない。でも、しあわせにはいろいろな形があり、自分で感じて気づいて自分の手で勝ち取るもの。夫婦2人で力を合わせてしあわせになるものです。私のしあわせ指数は100%です。

日本は交通が発達していて電車でどこでも日帰り可能です。また、家の雨漏りを心配することもなく、家の中にはテレビ、掃除機、エアコン等電化製品があふれています。チベットでは手足を動かさないと家事ができません。洗濯は洗濯板をつかうため力がいらいます。私は洗濯機がかわいく見えて毎日「頼むよ！」「ありがとう！」と声をかけ感謝して念入りに掃除し大切に使っています。

日本に暮らしてみても四季の素晴らしさを知りました。春には梅、桃、桜が咲き、新緑の季節。夏は海開き、学校にはプールまであります。秋はもみじ、冬になっても全然寒くありません。

教育システムも素晴らしく、私の子どもも幼稚園にお世話になって、先生は子どもをよく見てくれて本当に感謝しています。

医療機関も、故郷には5万人が住む町に診療所が1つしかなく衛生的にも厳しい環境です。チベットの平均年齢は今も50歳代です。私は結婚して12年目に子どもを授かったので高齢出産でした。大切な息子は小さい時に良く病気になるにぜんそくや川崎病を患いました。現在は元気に成長していますが、もし、チベットに住んでいたら助からなかったかもしれないので、日本で子育てができることをとても感謝しています。日本で生まれ、当たり前環境がとても恵まれているということをおみなさんは気づいていますか？私には日本が天国に思えます。

大切なメッセージ

日本はなぜ発展したのかを日本のお父さんに聞きました。「日本が発展できたのは教育のお陰。島国

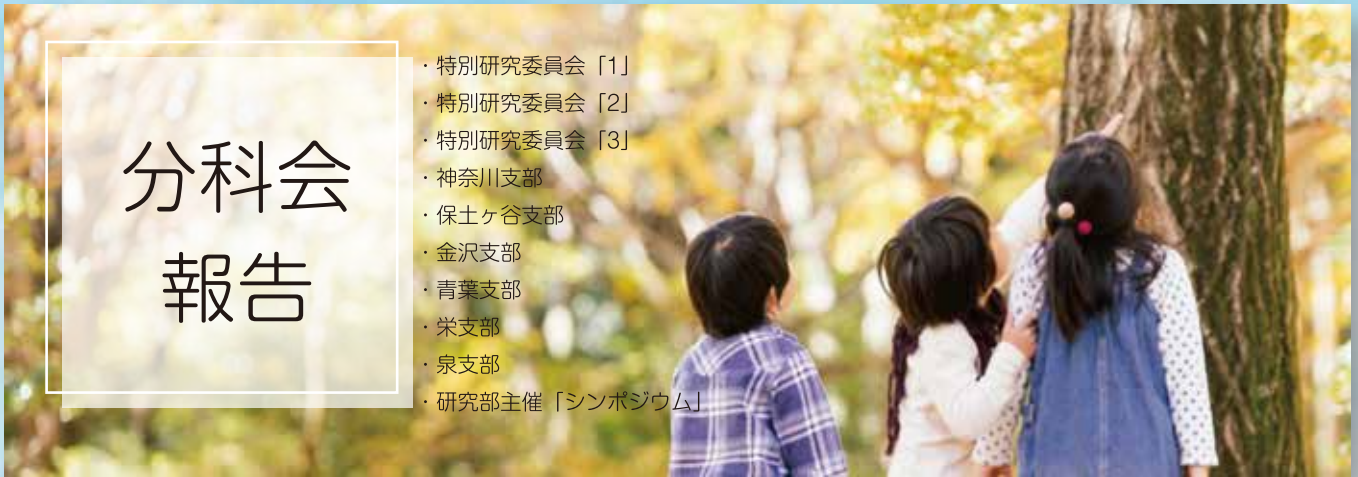
で資源にも恵まれていないが、日本は人を育ててきた。教えた、学んだ、技術を磨いて極めてきた。日本は知識と技術を磨いて発展してきた」と教えてくれました。日本のお義母さんは女性としてとても尊敬しています。そして、このお義母さんが私の考えを変えてくれたのです。ある日のこと「日本のお母さんは仕事があり、字が書ける、服もあってしあわせ。チベットのお母さんは苦労している」と言ったら突然お義母さんは怒ったように「日本もずっとしあわせで豊かだったわけではない。私の子どもの頃は戦争で一面焼け野原の貧しい大変な時代を過ごしてきた。日本人は涙と汗をかいて頑張ってきた。大変大変と言ってないで頑張れ！チベットも何とかなる！」と言われて目が覚めました。その時、チベットはこのままでは何も変わらない。自分が努力してチベットに貢献しようと思い立ちました。まず、チベットの子どもたちに教育を受けさせたい。勉強すれば自立できるようになる。そのためには学校を建設しようとアルバイトをしてお金を貯め、チベットでも協力してもらって6つの教室に182名の子どもたちが通う学校を建てました。現在は10校、3,000名以上の子どもたちが学んでいます。その中の卒業生が校長になるといううれしいことも体験しました。貧しい学生に大学の奨学金を作り、女の子が医大に入学し、ついには大学院に進んで大学の先生にもなりました。自立できたことを喜び自分も人を助ける人間になりたいと約束してくれました。



これまで理不尽なこともいっぱいありました。チベットは辛いことをいっぱい背負っている国です。国のために貢献しようとしてもヒマラヤ以上の高さの大変なことを乗り越えないと届きません。それでも故郷を変えたい、絶対に貢献してチベットの子どもたちを育てていきたいという思いで頑張ってきました。みなさんも素晴らしい職業に就き、人の子どもを預かる仕事をしています。それは日本の将来を背負っているということです。

異文化とは何か。私にとっては鏡です。日本を見てチベットを映し出せた。当たり前のことが見えてきて初めてチベットのこと気づいた。みなさんにもチベットのことを知ってもらい、より一層自分たちの環境・文化いろいろなことに気づいて自分の役割を見つけてもらいたいと思います。

最後に私の国の歌を聞いてください。「広い草原と山々にこの命を頂きました。大麦に感謝してしあわせに生きるんだよ」という意味の歌です。



分科会 報告

- ・特別研究委員会「1」
- ・特別研究委員会「2」
- ・特別研究委員会「3」
- ・神奈川支部
- ・保土ヶ谷支部
- ・金沢支部
- ・青葉支部
- ・栄支部
- ・泉支部
- ・研究部主催「シンポジウム」

第1分科会

特別研究委員会「1」

テーマ 私、ちょっと仕掛けてみました

～保育に少しのエッセンスを～

講師 ■ お茶の水女子大学こども園 園長 宮里 暁美先生

会場 ■ かながわようちえん会館会議室

特研1では、この一年「仕掛ける」というキーワードから保育を考えてきた。事例を持ち寄り話し合ったことをポスター発表という形でグループごとに発表し、その後、全体に年長児のグループが事例発表を行った。悩むことも多かったが仕掛けるということから、自分が一歩踏み出し、今保育者として何ができるかと考えるきっかけにもなったことを伝えた。発表の後、参加者もそれぞれの事例を語り合い、ワールドカフェという形で子どもの姿を見る事の大切さを共有することもできた。助言講師の宮里先生から、迷いつつも「ちょっと仕掛けてみる」ということの意味や子どもと向き合う時間

についてお話しを伺い、有意義な時間を過ごすことができた。
(金港幼稚園 芝崎恵子)



第2分科会

特別研究委員会「2」

テーマ 「遊び込む」が生まれる、「遊びこむ」を生み出す

講師 ■ 関東学院大学 教育学部こども発達学科准教授 三谷 大紀先生

会場 ■ ワークピア横浜

特研2では、ポスター発表という手法を取り入れての発表が特に印象的であった。

年齢別のグループがそれぞれ今年行ってきた「遊び」研究の過程を模造紙に書き出し（ポスター）それをそのグループの参加者が説明していた。ポスターとしてまとめることにより、発表者自身も自分たちが行ってきた研究の過程を振り返ることができ、より具体的に参加者への説明ができていたのではないかと感じた。

そして、この形式により、研究会の参加者皆が運営をしている雰囲気になり、参加者主体の活気にあふれていた。

もちろん、会に携わっていない初めての参加者も、その活気あふれる雰囲気の中で有意義な研修になったことは想像に難くないであろう。(舞岡幼稚園 相澤 謙太郎)



第3分科会

特別研究委員会「3」

テーマ どの子にもうれしい保育の探究

～障がいのある子どもや関わりの難しい子どものいる保育実践を考える～

講師 ■ 國學院大学人間開発学部子ども支援学科教授 野本 茂夫先生

会場 ■ 横浜ワールドポーターズ6F イベントホールA

特研3では、毎月グループごとに事例を持ち寄り、どの子にもうれしい保育のテーマのもとに話し合いを重ね、保育者相互の支え合いと、対話と協働の大切さについて学びを深めてきた。この分科会でも「仲間との関わりの中で成長する3歳児」の発表事例をうけ、保育者として子どもが大好き。何をやっても楽しいと思う気持ちにより困難を越えていく力と支えになり、子どもが好きということが重要という事に改めて気付かされた。参加者同士でも、ワールドカフェ方式で、障がいのある子どもも、ない子どももうれしい保育になるにはどうしたらよいかについて、発表事例や自分の体験を振り

返って話し合い、保育の経験や知恵を語り合いながら共有した。(青葉幼稚園 安井隆道)



第4分科会

神奈川支部

テーマ

主体的で対話的で深い学びを生み出すためのヒント

～興味・関心と試行錯誤をキーワードに～

講師 | 関東学院大学 教育学部こども発達学科専任講師 久保 健太先生 会場 | 横浜ワールドポーターズ

平成30年4月より改訂される新しい教育要領には、「主体的で対話的で深い学び」が必要とされている。学びには、①やりたい②やりたいけどできない③やった！できた！④いつでもどこでもできる⑤できるようになったことがコミュニティの中で出番を持つという5つの段階がある。「深い学び」は、「やりたいけどできない」ときに生み出される。そこで保育者は、「やりたい」に火が付くにはどうしたら良いか？「やりたいけどできない」という試行錯誤は、どのような援助によって続くのか？「興味・関心」と「試行錯誤」の2つのキーワードに着目して保育事例を発表した。遊びの中で

学びを深める場面において、いかにその場の子どもに寄り添えるかが大切だと学んだ。(羽沢幼稚園 越川孝子)



第5分科会

保土ヶ谷支部

テーマ

子どもの言葉に耳を傾けよう

～子どもの言葉から 心の動き 心の発達 子どもを知る～

講師 | 聖ヶ丘教育福祉専門学校専任教員 鈴木 恵利子先生 会場 | ナビオス横浜

『子どもの言葉に耳を傾けよう！』をテーマに子どもの言葉を集め、4つのグループに分かれてディスカッションを重ねてきた。子どもの言葉からその背景、保育者の言葉がけの重要性、目の前の子どもの“今”の姿を通して自らを振り返ることができた。「子どもの目線に立って子どもの声に耳を傾けることが一番の寄り添いなのだ気付けた」「仕事の効率や進め方ばかりに気を取られていたと気付いた」「子どもの言葉って面白い」「可愛い子ども達の姿をもっと受け止めていきたい」等々、言葉を集めていく中で、保育者自身の“今”の姿もよく見えてきた。保育の喜びや難しさ・悩みを研究部

員が共有し、共感し励まし合いながら、保育者としての感性を磨き合った。“教育は共育”である。(聖ヶ丘教育福祉専門学校 鈴木恵利子)



第6分科会

金沢支部

テーマ

保育を伝える・保育が伝わる

～幼児理解と援助の工夫～

講師 | お茶の水女子大学准教授 刑部 育子先生 会場 | ヨコハマジャスト1号館

本分科会では、4つのグループで小さなことに目をとめたエピソードを持ち寄り、伝え合うことから生まれる新たな視点や課題を大切に、2年間に渡りそれぞれが深めてきた事例について報告した。また「伝える」「伝わる」をキーワードに、対話を通して見えてきた子ども理解や援助の工夫、保護者に伝えるツール等について、参加者と共に考え合った。刑部先生からは、保育の中の小さなことに気づき、興味や関心を持って関わることの大切さ、他者と話し合うことは幼児理解につながることを、また外に向かった伝え方（プレゼンテーション技術）、多様に見えてくる写真や映像による記録

の有効性、保育の場面⇔出来事⇔エピソード⇔物語の過程について伺い、最後に「保育を伝える・保育が伝わる」とは子どもの学びや多様な表現に誰もが参加できる道をひらくことと締めくくられた。(関東学院六浦こども園園長 根津美英子)



第7分科会

青葉支部

テーマ

紙芝居を作ろう！

講師 | 童心社 編集部副編集長 橋口 英二郎先生 会場 | 神奈川産業振興センター

青葉支部では、毎回すぐ保育に役立つ事柄を研修に取り入れ、保育の充実力を入れている。今回は子ども達の大好きな「紙芝居」を手作りし、約束や伝えたい事柄を理解に導くために研修を重ね、その成果を発表した。

各園の遊具や園舎・飼っている動物・保育の取り組みや約束等、設けられた題材を子ども達の顔を思い浮かべながら、また保育者の意図を盛り込み作り上げた作品である。出来上がった「紙芝居」を子ども達に観せると反応も良く、親しみやすさから理解も早く子ども同士教え合う姿が観られた。

今後も各園の宝として受け継がれ、子ども達に楽しみや

知ってもらおうツールとして浸透していく様子を楽しみに、保育の充実を図るべく努力を考えている。

(愛和幼稚園 福岡和子)



第8分科会

栄支部

テーマ

表現の受取から始まる造形活動の考え方

講師 幼稚園・保育園造形講師 造形教室えのぐぼかん講師 石井 健先生 会場 横浜市教育会館

栄支部では、子ども達のドキドキ感・わくわく感を、造形活動を通してどのように広げていくか1年間研究し、3園の取り組みの発表が行われた。発表者からは実体験をすることや、活動に使う素材を身近に用意しておくこと。仲間と一緒に活動することで興味が広がったこと。話し合いを持ちながら行ったことで、いろいろな活動が広がったことなどの報告がされた。

講師の石井先生のおまとめでは制作活動には「習得」「表現」の2種類がある。造形の種は普通の保育の中にある。保育者は毎日の些細なことに目を向け、子どもの興味関心を「受け

取る目」を持つことが必要と話した。

(認定こども園中野幼稚園 中野どんぐり保育園 長瀬 薫)



第9分科会

泉支部

テーマ

プラス1からはじめよう

～夕方の保育をみんなで考える。より豊かな時間となることを目指す保育者間の連携～

講師 日本女子体育大学 幼児発達学専攻准教授 桐川 敦子先生 会場 ワークピア横浜

泉支部では「預かり保育」の時間を、預かっている時間ではなく「いつもの保育に少しプラスする時間(プラス1)」と考え、遊びの連続性や保育者間の連携について研究した。担任とプラス1(預かり保育)担当者が1日の子ども達の生活をどうつなげていくか。事例では職員会議でプラス1(預かり保育)担当者も交えて話し、カリキュラムを作ることで保育者同士共有できるよう工夫したなど、育ちを語る上で連携、伝達は重要であることを再確認した。参加者からは「プラス1の時間を研修で聞くことが少なかったので良かった」「プラス1の時間を充実させることで、教育課程時間もより豊かな遊びや仲間関係に発展するのではないか」など意見が出た。

講師の桐川敦子先生からは、異年齢で過ごす時間は子ども達にとっても発見や自由度がある時間だと思う。カリキュラ

ム作成などを通して、大人の利便性を追求するのではなく、子ども達の育ちを共有できる時間になるといいとアドバイスをいただいた。

(ぬくもりの森しんばし やよい台こども園 やよい台幼稚園 柳谷 太)



第10分科会

研究部主催
「シンポジウム」

テーマ

幼稚園教育要領等の改訂を、「主体的・対話的、そして深い学び」から考える

シンポジスト 鶴見小学校校長 益田 正子先生 会場 鶴見大学会館
池上小学校校長 寶來 生志子先生
鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園園長 山崎 和子先生
(公社)横浜市幼稚園協会副会長 渡邊 英則先生

この分科会は、幼稚園教育要領等の改訂を踏まえて、幼稚園や小学校が「主体的・対話的で深い学び」を可能とするような保育や教育をどのように行えばよいのか、具体的に考えていった実践を基に提案していただいた。

鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園の山崎先生からは、養成校と連携も行いながら、どのようにして園の保育を大きく遊び中心に変えていったか、また、鶴見小学校の益田先生からは、主体的な子どもに育てるために新たに赴任した小学校をどのように変えていったかという話をしていただいた。会のおまとめとして、池上小学校の寶來先生は、ご自身の実践や幼保小接続を踏まえた上で、今回の改訂の方向などについて

触れて話された。改訂について、具体的な子どもの姿や、保育や授業の工夫等を通して学ぶ機会となった。

(港北幼稚園 渡邊 英則)



不安を安心に！

横浜市こども青少年局保育・教育人材課
幼保小連携担当 中山 光恵

3月。年長児の皆さんは、小学校の入学を目前に、期待感と不安が入り混じったような複雑な心境ではないでしょうか。また、保護者の皆様も、我が子が、早く小学校の環境に慣れて楽しい生活を送ってほしいという思いでいらっしやることと思います。

1月2月は、小学校と交流活動をしている園もあることでしょう。小学校に行き、ふれあい、体験することにより、入学への安心感や期待感が膨らみます。「こんな風に優しい話し方ができる小学生になりたい」「分からないことを教えてくれる1年生はすごい」など感じるかもしれません。優しくされた経験が基になり、今度は相手に優しくできる子どもに成長していくことでしょう。



さて、小学校に入学すると、小学校により期間は少し違ってきますが、7月ぐらゐまでスタートカリキュラムを実施します。

スタートカリキュラムは、幼稚園での遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムです。入学直後は、「なかよしタイム」で、幼稚園での経験を生かした手遊びやダンスなどを通して心をほぐし、安心感がもてるようにします。集団での遊びや学級での活動を通してルールについて考えたり、話し合いをしたりして集団の一員としての自覚をもつようになることがねらいです。

スタートカリキュラムを実施した成果として、「新しい友達や先生との人間関係が早い時期にでき、安心して学校生活がスタートできた」「不登校がなくなった」といった学校もあります。

4月から小学生になるお子さんをもつ保護者の皆さん向けに、横浜市こども青少年局で作成したリーフレット「安心して入学を迎えるために」を、就学時健診の時に配付いたしました。「1年生のある日」「幼児期に育みたい資質・能力やそれを支える周囲の大人の関わり方」「入学に向けてのQ&A」が記載され、入学のイメージをもつことができると思います。是非、手に取りご一読ください。



リフレーミングという言葉があります。枠組(フレーム)をはずして、違う枠組みで見ること、異なる見方を見ることを指します。

例えば、このように、枠組みを変えると考えがポジティブになります。

騒がしい	→	元気 明るい
のんき	→	朗らか
マイペース	→	自分の世界をもっている

「これができないと小学校へ行けないよ」とか「そんなことをすると先生にしかられるよ」「友達に笑われるよ」など、心配だからこそ出てくる言葉だとは思いますが、お子さんの不安は増すと思います。

「学校で嫌なことあった？」を「何が楽しかったかな？」に、「給食は残さなかった？」を「給食でおいしかったのは何？」のように、声のかけ方を考えてみると、お子さんもポジティブ思考になり、学校に行くのが楽しみになるのではないかと思います。

子育て教育
相談室より

家庭料理は、子どもらの居場所をつくる

横浜市幼稚園協会 子育て教育相談室相談員 大森 由紀

春の七草がゆ、節分の豆まき、桃の節句のちらし寿司…この時期は食と結びつきのある行事が続きますね。お子さんと一緒に、七草をひとつひとつ読み上げてみたり、年の数だけ豆を数えて食べてみたりされたでしょうか？ 手の込んだメニューをいくつも並べなくても、普段のご飯が春色に彩られたりするだけで、気分も華やいでくるから不思議です。

ちなみに、和食というのは2013年に世界無形文化遺産に登録されたそうですが、みなさん、ご存知でしたか？ 脂分の少ない健康的な食生活が暮らしの伝統行事とともにあり、しかも四季のうつろいを楽しむ事ができるというのが選考理由なのだそうです。まさに、冒頭あげたような食卓の風景ですね。料理研究家の土井善晴さんは、この選考理由は家庭料理にむけられていることであり、文化遺産として認められたのは日本の家庭料理なのだとおっしゃっています。(料理研究家・土井善晴さんの講演録「一汁一菜 日本人の美学」2018年1月6日 読売新聞)

この土井さんという方は『一汁一菜でよいという提案』という本も書かれているのですが、話は料理のことにとどまらず、料理はアイデンティティすなわち自分が何者であるかということにもつながってくるということをおっしゃっています。その部分がなかなか興味深かったので、記事から一部引用させていただきます。

「自分のやっている料理がどういう役割を担っているのかを知ることは大事なことで、アイデンティティとつながってきます。(中略)…その基本的な出発点となるのが、一汁一菜と思っているのです。家庭料理は、子どもらの居場所をつくっているのです。家に帰るとご飯をつくっているって、何気ないことだけれど

安心する。安心は自信につながる。だって自分を守ってくれる人がいるということですから。自信は外に出ると勇氣になる。勇氣は大きくなったら責任というようなものにつながり、最後にはあの人を守るという愛情になるということです。家庭料理をつくる人は、無意識のうちに毎日、食べる人に与えているのです」

ところで、心理学には『マズローの欲求段階説』というのがあります。アメリカの心理学者マズローという人が唱えた説で、人間の欲求を5段階にピラミッド状の階層としてとらえ、人間は低階層の欲求が満たされるとより高次の階層の欲求を求めるようになる、というものです。一番下の階層は食べたい・寝たいなどの「生理的欲求」であり、これがある程度満たされると次の階層「安全欲求」を求めようになり、「生理的欲求」と「安全欲求」が十分に満たされると次は、自分が社会に必要とされているという感覚やどこかに所属しているという感覚のような「社会的欲求」を求めようになります。ここまではいわば外的に満たされたいという思いからでてくる欲求ですが、これ以降は、他者から承認され自分でも自分のことを尊重できる「承認・尊重の欲求」や自分の持つ能力や可能性を最大限発揮していきたいという「自己実現の欲求」が生まれてくるとされています。

果たして、土井さんがマズローの欲求段階説をご存知だったのかはわかりませんが、私たちが“今日の夕飯なににしようかなあ…”“明日のお弁当のおかずはなににしよう…”と思いを巡らせ差し出した一品は、子どもたちの身体だけでなく、心の土台もつくっているのだなと思いました。この春、ドキドキしながら新しい学年に向かう小さな背中を、食卓からそっと応援してみたいはいかがでしょうか。

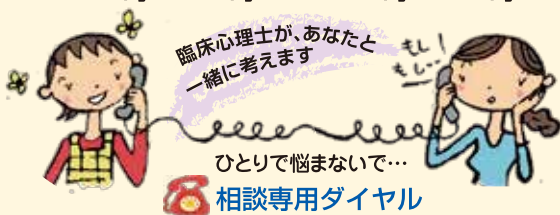
子育て教育相談室

【相談日】

毎週**火曜日・金曜日**(年末年始、祝祭日を除く)

【受付時間】

10時～12時 13時～15時



045-534-8837

公益社団法人 横浜市幼稚園協会
http://www.kids-yokohama.or.jp
TEL 045-534-8708

編集後記

これまでたくさんの成功を積み重ねて、いよいよ進級、進学と子どもたちはいつも以上に輝いて見えます。今年は特別寒い日が続き、インフルエンザ大流行もあってはらはらさせられました。それでも気づくと裏庭のしだれ梅がいい香りを振りまいていて春間近の気配がしています。

平成29年度もあとわずかとなりました。今年も父母の会や教員の活動、活躍をわかりやすく、皆様にお届け出来るよう心がけました。ご講読ありがとうございます。

(広報部長 浅沼郁子)